

ペットフレンドリーなコミュニティの条件

—コミュニティ疫学試論—

麻布大学 大倉健宏

1 目的

本報告の目的は、記述疫学的方法と質問紙による地域調査を併用して、ペットをめぐる実態の一部を示し、ペットフレンドリーなコミュニティモデル構築を試みることである。地域調査においては、それぞれの地域文脈があり、国際的な比較を行うことの困難は大きい。しかしながら、疫学研究という、地域の文脈を超えた比較を前提とする学問分野との出会いにおいて、広がりある比較が可能になるのではないだろうか。この報告の目的は二つの挑戦的な支柱に支えられている。1つは従来の社会調査法に対して、疫学の一分野である記述疫学を併用して新たなアプローチを提案することである。2つ目は個人、家族、居住、ネットワーク、コミュニティを、ペットを中心に据えて、新たなコミュニティのイメージを描くことである。

2 方法

2012年秋に実施した質問による麻布大学附属動物病院での調査、2013年夏に実施したアメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ市およびニューヨーク州ブルックリン市での質問紙による調査、2014年夏にブルックリン市およびバークレイ市で実施した質問紙による調査結果を分析し、「ペットフレンドリーなコミュニティ」を大都市の文脈から論じたいと考えている。本研究において試論として位置付ける、コミュニティ疫学では、社会学的な調査手法である地域調査と、疫学的な調査を地域レベルと併用し、PCR分析というDNAレベルでの分析を絡めながら、ペットフレンドリーなコミュニティの条件を、実証的に明らかにする。また、疫学研究の大きな長所である国際比較を行い、試論としての成果を提出する。

3 結果

犬を飼育しやすい地域のイメージについて、「広い空間や公園がある」という回答が最も多く、その他わずかな回答として「ペット友人が近くにいる」、「動物病院が近い」、「ペット関連の店舗が近くにある」があった。また、「飼育に必要な施設」と「ペットフレンドリーなコミュニティのイメージ」は、大きく異なっている。飼育に必要な施設としては、「公園」という回答が最も多く68%であり、「動物病院」は24%であった。この両者については飼い犬の犬齢によって説明された。「動物病院」は犬齢の高い飼い主による回答であった。一方で、「ペットフレンドリーなコミュニティのイメージ」は圧倒的に「公園」83%と回答されている。「ペット友人が近くに住んでいる」はわずか7%であった。本報告では「飼い主」と「公園」および「ペット友人」をネットワークと考える。

4 結論

「ペットフレンドリーなコミュニティ」が飼い犬を中心として、ペットと共生できる街を提案する意義は大きいと考える。そこでは下位文化による結合が、「相談」「親交」「実用的」のいずれにも収斂しえない、住民の「ペットフレンドリーなコミュニティにおけるシビリティ」が想定されるだろう。まだ試論の域を出ていないが、「ペットフレンドリーなコミュニティ」モデルを提示したいと考えている。

文献

大倉健宏, 2015, 『ペットフレンドリーなコミュニティの条件——コミュニティ疫学試論 (仮題)』ハーベスト社。